

伊勢物語二段階成立論続貂第二

—六つの批判への再反論と第四十五段詳述—

田村俊介

第1節 狩使本その他について

平成十一年九月十一日、大阪女子大学で開催された関西平安文学会に於いて、私は本拙稿と同じ表題、似た副題で口頭発表した。

席上、表題の「三段階成立論」という名称は不正確である、との指摘を受けた。片桐洋一氏の仮説は『伊勢物語』の成立時期をまず大きな二つの指標を用いて三分するものであるが、その二つ目の指標も細かく言えは二つあるし、所謂「第三次」なども更に小区分されるだろうから、「多段階成立論」と呼んだほうが正確なのである。私は昭和四十三年の『伊勢物語の研究〔研究篇〕』（以下、『研究篇』）と略することもある。）や昭和六十二年の『伊勢物語の新研究』（以下、『新研究』）と略することもある。）を熟読して居り、そのことは前もってわかっていた。しかしながら、文学研究はその作品に即した個有の方法で行うべきだと考えている私は、『伊勢物語』の場合、第一次から第三次へと時代の流れを辿るダイナミズムよりも、どちらかと言えば、一段一段の解釈を大切にしたいのだが、そのためには小区分よりも大区分のほうが現実的に役立つので、今後も、憚りなく、「三段階」という言葉を用いて行くことにする。当日は、主旨をうまく伝える言葉を探す時間も無く、私の回答は不十分だった。

第二に、これは表題副題とは関係ないが、所謂小式部内侍本系（狩使本系）について勉強不足であるとの指摘があった。勉強不足はその後とも変わりはないが、御発言をきっかけに改めて考えた末の見通しを申し述べたい。

内田美由紀氏「伊勢物語「小式部内侍本」の本文について」（平9年3月『中古文学』臨時増刊号）は、その前半——主として「二」「三」

——では、現存小式部内侍本系諸本の中で、大島本付載小式部内侍本（略称「大島本小」）が比較的古態を保って居り、天理本付載小式部内侍本（略称「天理本小」）や大島本付載皇太后宮越後本（略称「大島本越後」）はこれを改訂したものであると述べている。「三」では、通称G段に就いて、大島本小の古態性を言うが、賛成する。次に、「二」ではH段に就いて、やはり大島本小の古態性を言うが、私は私なりに非文学的方法によって、考えてみたい。全く違う道筋を辿って同じ結論に至るはずである。^{（注1）}

H段は、男が、装着を終えたばかりの若い女の子に、「釧子（さし）」^{（注2）} かんざしをプレゼントする物語である。女の子は、既に、たくさん美しいかんざしを持っている。実際に頭につけるのは、多分、他のかんざしだろう。それでもよいから、櫛箱を開ける時に、しまったままの私のプレゼントを見て、私を思い出してほしい、と控え目な和歌を贈る。

【大島本小】

あまたあらはさはせずともたまくしけあけんをりく思ひてにせよ

という和歌であった。第二句までは、他にたくさんお持ちなら、自分の贈った釧子をお挿しにならなくとも、の意である。

【泉州本】（講談社学術文庫本に拠る。193頁の〈補説〉）

あまたあらはさはすとも玉くしげあけむをりをり思ひいでなむ

という本文の場合、やや不自然だが、柳田忠則氏に従って、他にたくさんお持ちなら、他の釧子をお挿しになることでしょう、それでもやはり、の意と考えておこう。

【天理本小】（天理図書館善本叢書3の186頁に写真があるので、照合した。）

あまたあらはさしわするともたまくしけあけんおりくおもひいてなん

以上、三種の小式部内侍本系諸本の優劣を判定する際、本文批評の対象となり得るのは、和歌の中では唯一箇所、第二句である。

「とも」という助詞は、周知の通り、終止形に接続するのが正格であり、連体形接続の例は『徒然草』まで下る。泉州本の「する」は「す」の連体形としか取れないから、中世的本文である。天理本小「挿し忘る」は、中世語でさえない。

現代語「忘れる」に関して注意して置かなければならないのは、具体的動作をしないことを一回的に言う時があることである。従ってアクセサリーを身に「つけ忘れる」、「はずし忘れる」のように、具体的動作を第一動詞に持つ複合動詞も非常に良く発達している。それに対して、

中古語中世語「忘る」は、

忘るなよほどは雲るになりぬとも

空ゆく月のめぐりあふまで

(天福本第十一段)

目かるとも思ほえなくに忘らるる

時しなければ面影にたつ

(同第四十六段)

秋の夜は春日わするものなれや

霞に霧や千重まさるらむ

(同第九十四段)

のように、「頭の中から消える」であり、参考までに打消表現が付くと「たとえ目の前になくとも、頭の中にはある」の意になる。従って『源氏物語彙用例総索引 自立語篇』から、その逆引き表も使って、「忘る」を第二動詞に持つ複合動詞を検じてみると、「思ひ忘る」とその敬語体がほとんどを占めるといふことになり、他には「棄て忘る」があるだけであり、その「棄て忘る」全二例も、

「……今はこの世のことを思ひたまへねは、駿方の行ひも棄て忘れてはべるを」

〔若紫〕(一)

「……この世のことは棄て忘れはべりぬるを……」

〔明石〕(八)

のように、非常に狭く限定された用法なのである。そのような意味で、天理本小「さしわする」は『改訂本文』でさえなく、擬古物語の転写本などにもしばしば起こるような「語頭のハ行転呼」であり、「(髪に釵子を)挿し忘る」などというのは、現代の学者達の『誤植』とさえ言えるのである。

右のような理由で、「大島本小」||大島本付載小式部内侍本の相対的古態性を言う、論文前半の論旨に賛成したい。

論文後半では、小式部内侍本系（前半の論旨に拠り、大島本付載小式部内侍本に代表される）が古態を保つ、これを改訂して出来上がったのが普通本（天福本に代表される）だということである。その論拠は、例えば、天福本第七十四段に当たる

むかしおとこ女をうらみて

いはねふみかさなる山はとをけれとあはぬ日おほくこひわたるかな

あまのすむさとのしるへにあらねともうらみむとのみ人はいふらん

（内田氏論文97頁下段）

という小式部内侍本系の一段であって、一首目の万葉歌（「いはねふみかさなる山は……」）の返歌として、『古今集』では小野小町作と明記されている二首目（「あまのすむさとのしるへに……」）は取り合わせがおかしいとの判断で、天福本など普通本は小野小町歌を削除した、とのことである。同様に、第七十一段でも小式部内侍本系のほうが一首多いが、その一首の万葉歌

神風の 伊勢の浜荻 折り伏せて 旅寝やすらむ 荒き浜辺に

（全集『万葉集』。500番）

は留守を守る妻の詠んだ歌であり、『伊勢物語』の伊勢斎宮関係の話と明らかに作歌事情が異なるため、普通本が削除した可能性もある、要するに全体的に普通本は出典と照らし合わせて改訂を行なっている、という主旨であろう。しかしながら、『研究篇』、特に第一篇で詳述されている所から考えて、作者の違う歌、作歌事情の違う歌をどんどん付け加えて物語をふくらませて行くのが当時の自由な文学的空気であって、その確実な例として、橘忠基の「忘るなよほどは雲るに……」の東下り章段取り入れを挙げることができるが、逆の方向は例があるのだろうか。これが後半の【論旨】に対して、まず頭に浮かぶ疑問である。

天福本第七十四段

むかし、男、女をいたううらみて

岩根ふみ重なる山にあらねども

逢はぬ日おほく恋ひわたるかな

（集成本。以下も、原則として集成本）

は、第二句から第三句にかけての「にあらねども」が解釈の鍵を握る。諸注はつきりとは指摘していないようだが、私見に拠れば、「にあらねども」は、有名な後撰集歌「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」のそれと全く同じように「比喩のための否定表現」であって、「否定のための否定表現」ではない。英語の比喩表現「as B」節に仮定法が用いられる現象と、又、日本語の比喩表現「……やう

に「節に「薫が中君に対して）こまやかに、世の中のあるべきやうなどを、はらからやうの者のあらましやうに、教へ慰めきこえたまふ。」（「宿木」〔八〕）のように、反実仮想の「まし」が用いられる現象と同じ原理である。恐らく本当はすぐ近くにいるのに、あたかも「京と伊勢」程遠く離れているかのような恋愛しかできない気の弱さを苦笑いする、或いは、男を寄せつけず、心理的な距離を保つつれない女にいつまでも縛られている自分を笑う、といったような自虐のおかしみを狙った段なのである。ちょうど第五十六段、

むかし、男、臥して思ひ、起きて思ひ、思ひあまりて、

わが袖は草の庵にあらねども

暮るれば露の宿りなりけり

と同じように、男の詠歌はひとりごとである方が文学的に善い。贈歌であったとしても、女の性格、二人の間の心理的距離から考えて、どうせ返事はもらえなかったのである。

右のような理由で、大島本付載小式部内侍本が普通本のもととなったという内田氏説には従えない。やはり通説通り、普通本から大島本付載小式部内侍本が派生し、論文前半の論旨を合わせると、その後天理本付載小式部内侍本、大島本付載皇太后宮越後本、泉州本、が派生したのである。^(注3)

しかしながら、右の三、四本はあくまで現小式部内侍本系である。原小式部内侍本系、と言うより、狩使の段を冒頭に置く原狩使本系は、いつ頃、生まれたのであろうか。

狩使本系に関する伝説としてよく知られているのは、平安末期の伊行が『伊勢物語』の題号を合理的にするために初冠本系『伊勢物語』では、六十九番目ぐらゐに置かれていた狩使の段を一番目に置き換えた話である。定家はこの段序の操作を「狼籍」と批難しているが、昭和六十一年、渡辺泰宏氏「続・伊勢物語小式部内侍本考」はこれを否定した。初冠本系は主として光源氏の十代後半から第十二帖「須磨」までの原型として、その段序に至るまで、尊重された。一方では、第十七帖「絵合」には『伊勢物語』という書名が見えている。誤解か正解かは別として、ならぬ話を冒頭に置いていても『伊勢物語』と呼んでいい、という認識が広まったはずである。別に『源氏釈』の著者に限らず、狼藉の譏りを受ける危険を冒してまで、題号に義理を立てて段序を入れ換えたりするはずがない。やはり狩使本系は『源氏』以前から既に行なわれていたと考えたほうが自然である。^(注4)

そこで思い出されるのが、内田氏の、小式部内侍本系（＝狩使本系）の自由な構成から、普通本（私は、初冠本系と言いたい）の一代記的構成へという発想である。（このような論旨は、後半、即ち普通本の天福本を比較の対象とした「五」「六」のみならず、大島本付載皇太后宮越後本を比較の対象とした「四」でも述べられている。）私は前者を第二次伊勢物語（片桐氏の言う第一次章段と第二次章段を合わせた伊勢物語）、後者を第三次伊勢物語（天福本に代表される現行形態）と見做したのである。

『伊勢物語』は、やはり、伊勢斎宮との恋愛譚を冒頭に置く数段、若しくは、十数段が出発点であった。出発点の正確な段数は不明だが、ともあれ、『古今集』編纂時（九〇五年）には十数段であった。九〇五年以降、増益して、『雅平本業平集』の撰集資料となった。そのことは、後にもその別の主張について第3節で触れることになる。渡辺泰宏氏の高名な論文（昭和58年12月「在中将集・雅平本業平集考」）で主張されている。もつとも『雅平本業平集』の成立年代について、渡辺氏は十二世紀以降としているが、私は、後述の通り、片桐氏に従って、九五一年から九八七年までの期間中の或る年と考えたい。その年を通称のイニシャルを取って、西暦M年とする。西暦M年よりもほんの少し後のZ年には、『在中将集』が編まれたが、Z年よりもあとのある年、初冠本が派生した。既存の狩使本伊勢物語Ⅱ第二次伊勢物語の五十段弱に新たな章段が加わったのみならず、内田氏が言われるような方向で調整が行なわれた。既存の詞章をいじるようなことは少なかっただろうが、その代り、新たな章段も考慮に入れての大幅の段序の入れ換えが行なわれ、一代記として構成が整えられていったが、重要なのは冒頭に、伊勢を舞台にする話に換えて奈良を舞台にする話が据えられたことである。この時が初冠本の出発点である。出発点での章段の数は五十段弱よりは数十段多いということ以外不明だが、明らかなのは紫式部の頃にはほぼ百二十五段揃っていたことである。その後、絵合巻の物語合せで一番高い評価を得たし、現に五十四帖を通じて最も重要な出典となっていることもあって、次第に主流になっていった。『源氏』以前にも主流であったか、それとも、傍流であったかは不明だが、明らかなのは、『源氏』以前には「分家」であったことである。一方、「本家」伊勢物語である狩使本は、「のれん分け」の後も、傍流になったか主流であったかは別として、ともかく行なわれていて、建仁二年（一一〇二）の頃かそれよりも前の頃には、有名な「三本差別説」も唱えられているぐらいであったが、定家が「不可用之」と言ったせいかわ別の理由か、衰退の一途をたどり、現在では「散佚本」と言われなくてはならない程、その輪郭についてはともかく、本文が伝わっていないような有様である。以上が、狩使本に就いて、学会発表以降考えに考えた末の見通しであり、粗々図示すると、図1のようになる。

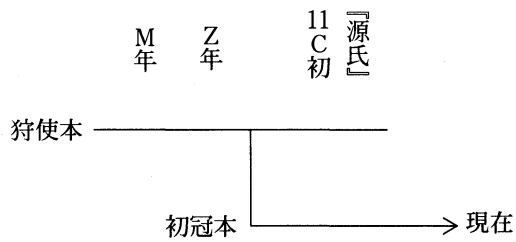


図1

内田氏が根拠にしたような写本に基づかず、雲をつかむような想定であるが、もしのを射たものであるとすれば、内田氏論文を熟読し吟味した成果であり氏の発想のすばらしさから得た学恩と言う他ない。即ち、ちょうど「青表紙本 対 河内本」と同じように共時的対立とされてきた「狩使本 対 初冠本」を、コペルニクスの転換によって、通時的対立と見做すことも可能であると思うようになってきたのである。分岐点は西暦Z年よりやや後である。その前は「狩使本の時期」、その後は「狩使本初冠本同時並行の時期」である。このような大胆な想定をするのもひとえに三段階成立論のためである。仮説の当否は賛否の学者の数、名前ではなく、学問的根拠の数、そして質であるという立場からするならば、平成十年代初期に於いて、成立論争は永遠に決着がつかないように見られている。しかしそのような論争も、いつの日か、解決、如上の立場に即した解決を迎えるものである。狩使本論という難題に敢えてチャレンジして御叱正を乞おうとしているのは、自分なりにその糸口を見つけたいからだが、例えば、口承文芸的文芸から書承文芸へ、ソ系指示語からコ系指示語へ、というように文体、語彙をダイナミックに論ずる研究——それは、現時点では、いやおうなしに天福本を底本とするものになってしまし、辛嶋稔子氏論文が出た頃もそうだった——を不毛にしないために、図1の中で一番大事な部分は、初冠本が狩使本から派生した時期である。

例えば、複数の論者が唱える紀貫之作者説、正確に言えば、紀貫之初冠本百二十五段大部分作者説を加味して図1を再構成すると、その時期はZ年より前、M年よりも前、M年よりずっと前に書き込まなくてはならない。しかしながら、『在中将集』（正確に言えば「在中将集の基礎となった原小相公本」）は何故、初冠本百余段に対して黙殺に近いものをもってしたのか、その「集大成」的性格から言っても、複数の論者に疑問を提示せざるを得ない。『在中将集』が直接的に、及び、『雅平本業平集』を経由して孫引き的に採歌し詞書に採り入れたところの『伊勢物語』が、たとえ初冠本系でないにしても、その後で優先順位七番目か八番目ぐらいの原資料として初冠本百余段を繙いてみれば、手もとにあった六種の原資料からは得られなかった詞章なり情報が得られたはずである。それをしなかった特別な事情があったのか、初冠本系が西暦Z年に於いて、西暦M年と変わらず、余程権威、流布状況その他が劣っていたのか、何か説明が欲しいところである。

第2節 三段階成立論と六つの批判

前置きが長くなつたが、ここで改めて三段階成立論の三段階を紹介する。

第一次成立章段（小段）は、昭和五十年『鑑賞日本古典文学第5巻 伊勢物語・大和物語』の「総説」に拠れば、

二・四・九の一部・四一・六九・八二の一部・八三の一部・八四・八七の一部・九九・一〇七など（15頁下段12～13行）

の十数段であり、『古今集』に業平歌として採られているという特徴を共有している。『古今集』業平歌は、他の詠者の場合と比較して、詞書が明らかに長大である。それは『古今集』が既に存在していた第一次伊勢物語の本文を尊重したためと考えられるのである。「総説」では具体例として第九段の末尾と対応する『古今集』四一一番歌との上下二段での引用があり、後に説明が加えられている。

私は同じ第九段第一段と対応する『古今集』四一〇番との関係にも興味を持っている。「かきつばた」の折句が「巻九 羈旅」の部に入っている点である。四三九番の「をみなへし」の折句は当然の如く「巻十 物名」に分類されて居り、やはり『古今集』編集に於いて『伊勢物語』の地の文は特別扱いされていたようだ。

もつとも、第一〇六段や第二十五段のように、逆に『古今集』を材料に『伊勢物語』が生成したと考えられる章段もあり、第一次成立章段とそれ以降の章段とを完全に識別することは困難なのかもしれない。片桐氏も先のように章段番号を列挙する前に、「第一次『伊勢物語』から存在していた章段をはっきり指摘することは必ずしも容易ではないが、いちおう、」と前置きして居られる（15頁下段10～12行）。

後述の通り片桐氏は「昔男」の人間像も三段階に分けて仮説しているのだが、その際にも第二次章段の「昔男」像をおおむね第一次章段の延長と考えて居られるようであり、だとすれば、「第一次／第二次」の区分は、「第二次／第三次」と比べてはつきりしていないか。少なくとも本拙稿及び『伊勢物語』に関する前拙稿（『伊勢物語三段階成立論続貂——口承文芸から書承文芸へ——』。平成11年8月『富山大学人文学部紀要』）は、「第一次／第二次」の区分を第三次との区分ほどには重んじていない。

第二次章段は、

一・一〇・一六・三九・四〇・四二・四三・四四・四五・四六・四七・四八・五一・五二・六六・六七・六八・七六・七七・七八・七九・八〇・八一・八五・八六・八八・九三・九四・一〇〇・一〇一・一〇二・一〇三・一一三・一二五

であり、この中にはその一部のみが第二次成立である章段も混ざっているが、第一次章段と合わせておおよそ五十を数える。これら約五十の章

段に共通する特徴は、現存業平集諸本、なかんずく『雅平本業平集』・『在中将集』（慣例により、以下両業平集と呼ぶこともある）に採歌されていることである。『雅平本業平集』と『在中将集』とは、『研究篇』の第二篇第三篇で明らかにされている通り、編纂方法その他が大きく違う。にもかかわらず、採歌されている章段約五十がほとんど一致するという現象は、共通の源泉を想定させ、その源泉が第二次伊勢物語だと考えられるのである。従って、第二章段成立の上限は第一次伊勢物語の後、下限は両業平集成立時である。両業平集成立の上限は『後撰集』（九五二年）、下限は、先行する後藤利雄氏の論文に拠って、貞元元年（九七六）から永延元年（九八七）に成立したとされる『古今六帖』である。

第三次成立章段は、第一次・第二次以外の七十以上であり、その成立時期は第二次伊勢物語より後、下限は、私見も加えて言えば、『源氏物語』（前編は一〇〇八年以前、後編は一〇〇八年以後）である。

以上のような三段階成立論はその後定説化したようにも言われるが、対する反論（疑問）も多方面から提出され、平成七年の時点では六つの点にまとめられている。

段階成立ではなく一回的な成立ではないかとするもの、第一次『伊勢物語』が十数段では物語としてあまりに小規模ではないかとするもの、特定の歌集に存在しないからその物語はその歌集以後という考えには従えないとするもの、『業平集』の成立年代への疑問、業平に始発しながらなぜ異質な方向への大きな増益が始まるのか、一世紀近くも人々がそこにこだわった理由とそのエネルギーは何か、などである。

（木戸久二子氏「研究の現在と展望」）

（『伊勢物語の視界』所収。書き下し）

このうち第五点第六点第二点の反論に対する再反論は、前拙稿「伊勢物語三段階成立論統紹——口承文芸から書承文芸へ——」に述べたところにどうしても付け加えないことはない。第一点は、更に細かく、第一章段から第三章段まで用語法や創作技巧に共通性があるとするものと、段序にも深い意味があるという主旨のものに分けられる。このうち、例えば田口尚幸氏「原体験へと回帰する昔男——伊勢物語一―二〇段に見る〈心〉と〈かたち〉の二元論——」（平11『平安文学論究』第十四輯）などは、論文としてはすばらしいものに違いないが、「反論」の立場にとらわれているような気がした。私のように三段階成立論を支持する立場から言えば、田口氏論文のすばらしさは、第三次

伊勢物語作者、編者の、章段排列や書き加え、編集の手腕のすばらしさとして読み換えられるからである。第一点は、言わば内部徴証に拠る議論に過ぎず、決定的な反論にならない。確かに片桐氏の内部徴証も傍証として有力ではあるが、出発点は外部徴証に拠るので、その当否、即ち、第四点と第三点が正しくないか正しいかの再検討が肝心要めである。

第3節 第四点の再検討

第四点の批判をする論文、即ち両業平集が十二世紀以降に編纂されたとする論文として、

イ、福井貞助氏「業平集考」(昭和40『伊勢物語生成論』)

ロ、井川健司氏「現存本業平集の成立」の「二」(昭46『平安朝文学研究——作家と作品——』91頁)

ハ、山田清市氏「在中将集の成立と典拠伊勢物語の性格」(昭47『伊勢物語の成立と伝本の研究』)

ニ、渡辺泰宏氏「在中将集・雅平本業平集考——その性格と伊勢物語の成立に関する試論——」(昭和58年12月『国語と国文学』。平7『伊勢物語の視界』に再録)

勢物語の視界』に再録)

ホ、鈴木隆司氏「在中将集の性質と成立(上)」「同」(下)「(平成10年2月3日『国語国文』)

が挙げられる。但し最も新しいホはあくまでも在中将集の最終的な成立年代が院政期以降、「少なくとも公任時代よりは後」とするものなので、外部徴証としての無効性を強調しているわけではない。

まず、ニの渡辺氏論文のうち、『在中将集』が建仁二年(一一二〇)以降とする論述に対しては、ホの鈴木氏論文が反論している。

一方、渡辺氏の論拠は、宮内庁書陵部蔵の聞書『伊勢物語』に、伊勢物語三本差別説の記事があり、同書に「于時建仁二年季夏中旬霖雨之間以仮日終此功」という記述があることから、「業平自筆本」は「名のみ立つ」(四三段)の歌に始まるとする説が建仁二年頃に流行したと考えられるとする点にある。渡辺氏は、在中将集が「名のみ立つ」の歌をもつのはこの三本差別説にひかれたとされているのである。しかし、一首の歌の存在のみによって集全体の成立を特定し得るのかという疑問に加えて、この記述が、なぜ業平自筆本説が建仁二年頃に流行したという証明になるのかというのも疑問である。さらに、範兼『和歌童蒙抄』や頭昭『古今集註』に見られる、

又業平ガテヅカラカミヤガミニカケル伊勢物語ノ朱雀院ノヌリゴメニアリケルニハ、タマ右近ノ馬場ノ日ムカヒニタテリケル女ノカ

ホ、シタスダレヨリホノカニエケレバトゾカケル。

といった記述からすれば、「業平自筆本」説が建仁二年頃に降つて湧いた訳ではないことになる。この書き方からすると、そう呼ばれる本そのものが存在していたのかもしれない。いずれにしても、「業平自筆本」説をもって在中将集の成立時代を特定するのは、無理があるだろう。

同じ渡辺氏論文のうち、「雅平本業平集」の成立時期に関しては

○『雅平本業平集』は小式部内侍本伊勢物語の後に成立

○小式部内侍本伊勢物語は『源氏物語』の後に成立

○従つて、『雅平本業平集』は『源氏物語』の後に成立

という三段論法である。一般に三段論法は論旨明快で読み心地の良いものであるが、こと人文科学の場合、類推の上に類推を重ねる結果に成りかねない。特に私が疑問に感ずるのは第二項であり、第二項は、一年前の昭和五十七年に発表された「伊勢物語小式部内侍本考——その形態と成立に関する試論——」の276頁下段16行目〜278頁上段10行目で詳述されている。この部分は三つの段落から成り、第一の段落（276頁下段16行目〜277頁上段末）では、「初段の成立した時こそが伊勢物語の本格的な生成の開始された時であった」こと、第二の段落（277頁下段1行目〜278頁上段3行目）では「源氏物語は初冠本伊勢物語を素材として構想された、そしてそれは初冠本伊勢物語を投影している」こと、第三の段落（278頁上段4行目〜10行目）では、次のように述べられている。

以上のような調査によれば、そのいずれもが伊勢物語の形態としては初冠本がその主流であったことを指し示しているように思われる。従つて、小式部内侍本の成立については先に掲げたうちの(b)小式部内侍本が初冠本の発展過程から派生したとするのが良からうと思われる。そして、その派生の時期であるが、源氏物語第一部に初冠本が反映していることから見て、それは源氏物語第一部成立以降、少なくとも同時期と考えられる。

（昭和57年10月『武蔵大学人文学会雑誌』14巻1号。昭63『日本文学研究大成 竹取物語・伊勢物語』（片桐氏編）に再録。引用は再録に拠つた。）

『源氏物語』の「須磨」「明石」ぐらゐまでの巻々に、初冠本の東下りの諸段までの内容と段序が反映しているとの見解は、私のように『源

氏』の現行巻序を支持する立場からも、渡辺氏論文のように青柳秋生氏や武田宗俊氏の成立論を支持する立場からも、充分肯定できる。だが、それが何故「伊勢物語の形態としては初冠本がその主流であったことを指し示している」のか全くわからない。紫式部は文献学者ではなく作家であり、しかもこの上なく個性の強い作家であるのだから、初冠本と狩使本（小式部内侍本）のどちらが主流であったかという観点ではなく、どちらが光源氏の青春を描くのによさわしいかという観点で原型を選んだはずである。『源氏』への投影を強いて根拠として使うならば、『源氏』の爆発的流布によって、初冠本が次第に主流に成って行った可能性のほうがむしろ高いくらいである。

輪をかけてわからないのは、『源氏』への初冠本の投影が何故「（小式部内侍本の）派生の時期」が「源氏物語第一部成立以降、少なくとも同時期」である根拠となるのか、である。

続いて、ロの井川氏論文に対しては公任撰『三十六人撰』『深窓秘抄』を根拠にして、ハの山田氏論文に対しては『萬葉集時代難事』（寿永二年以前が通説）『袋草子』等を根拠にして、鈴木氏が適確な論述をしているのでぜひともホの論文を参照されたい。

最後に私からの再反論を付け加えよう。

両業平集の成立がもし十一世紀半ば以降なら、いやしくもインテリである以上、「源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり」と言われるくらいだから、編者は必ず『源氏物語』を読んでいるはずである。「総角」〔二六〕段落で句宮が業平の歌だと言っている「うら若みねよげに見ゆる……」（天福本『伊勢物語』第四十九段）を何故採らなかつたのか。

かつて、片桐氏が「『拾遺集』（一〇〇六）を見た形跡が無いから、両業平集の成立は十世紀である」と述べたのに対し、イロハニの四氏は「『拾遺集』は流布しなかつたから、編者が見なかつただけである」と反論した。これらの活字は消えてなくなならない。なくなればかりか、学界で高い評価を受けて再録されたものまでである。である以上、『拾遺集』の場合と同じように、十一世紀に『源氏』が流布しなかつたことを実証しない限り、両業平集の成立を十二世紀以降に引き延ばすことはできないのである。周知の通り、『源氏物語』完成後たった十数年しか経たない頃、一介の受領の娘が宇治十帖を含めて暗記する程熟読していたことが『更級日記』によってわかるのである。

第4節 第三点の再検討

擬古物語の成立年代に関して、いかなる概説書や文学史辞典を繙いてみても、まず言及されるのは『風葉集』に採歌されているか否かであ

る。例えば『石清水物語』のように『風葉集』に採歌されていれば、文永八年（一一七二）以前、例えば『白露』のように『風葉集』に採歌されていないならば文永八年以降というのは中世文学研究の基本中の基本であって、更に『しのびね』のように『風葉集』に採歌されていても現存本から採歌したとは思えないような場合、第一次『しのびね』（若しくは、比較的初期の『しのびね』）が文永八年以前、第二次『しのびね』（若しくは、比較的後期の『しのびね』）が文永八年以降という結論が導き出されるのである。

『風葉集』と現存本業平集の性質の違いは充分承知しているつもりだが、それにしてもこのような中世文学研究の常識から判断して、片桐氏に対し、「特定の歌集に存在しないからその物語はその歌集以後という考えには従えない」と言うのはいささか厳し過ぎるのである。

『雅平本業平集』が『伊勢物語』から採歌していることは、『研究篇』142頁の論証によって、極めて確実となった。その『雅平本業平集』と『伊勢物語』諸段との関係を考える際、ついつい、『風葉集』と擬古物語諸作品との関係を連想してしまうのは突飛なのだろうか。いずれにせよ、私のように広く浅く勉強している者から見ても、三段階成立論は『伊勢物語』専門家達の間で不当に辛い採点をされているように感ずる。即ち、『雅平本業平集』だけでも、第二次以前と第三次『伊勢物語』とを区分する指標たり得る。指標として『在中将集』が加われば、確かさが二倍になる。二倍どころか、四倍にも五倍にもなる。

一般論だけでは論証にならぬので、続いて、具体的議論に移ろう。

一 業平集の指標としての無効性を主張したものとして

イ、上野理氏「伊勢物語の方法」（昭和52年11月『国語と国文学』）。「伊勢物語の視界」に再録）

ロ、石田穰二氏「解説」（昭和54年初版角川文庫『伊勢物語』）

ハ、河地修氏「伊勢物語成長論について」（一）同（二）（昭和54年1月7日『東洋』）

がある。これらイ〜ハの論文は、前節のイ〜ホの論文と違って、業平集十世紀成立を前提としている、或いは、前節のイ〜ホのように十二世紀以降成立を積極的に主張しているわけではない。その上で、業平集編者が、現行『伊勢物語』に近い百余りの章段の中から五十に満たぬ段（片桐氏の言う第二次以前の段）の和歌のみを選んだ、と説くものである。例えば、ロの石田氏「解説」では次のように説かれている。

在中将集、雅平本が、当時の『伊勢物語』からその含む歌を洩れなく採録したと対して、あり得るもう一つの場合が、もちろん想定される。二集が、もっと規模の大きい『伊勢物語』から、何らかの基準あるいは見当で、業平作と思われる歌を選んだ、という場

合である。

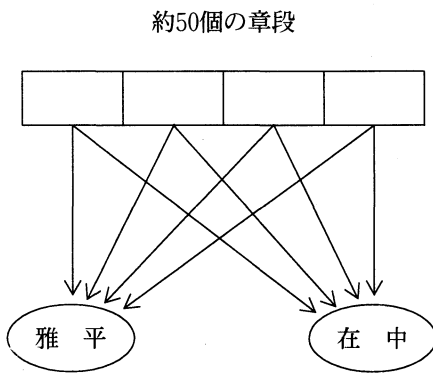
氏の仮説に私が困惑を感じるのは、氏の精緻な論証を読んでも、この、選んだのかもしれないという可能性が必ずしも否定しきれないという点にある。氏の説のとおりかもしれないが、また、そうでないかもしれない。選んだのではないという保証は、結局どこにもない。これは事実問題であるのだから、実証的にこの点の決着のつけられることが先決であるだろう。とすれば、仮説と称するにせよ、そうした説を立てることの当否そのものが実は問われねばならぬと私は思う。

(略)

選んだのか、総てを採ったのかということとは、前にも言ったように事実問題であつて、この事実問題の決着がつかないのに、一方に決めることは、サイコロを振るに等しいことである。

(角川文庫286、288頁)

図 2



だが、「サイコロを振るに等しい」ということは、「当時の『伊勢物語』からその含む歌を洩れなく採録した」可能性も50%はあるということだろう。実際、互いに無関係に成立した二つの歌集が採歌した章段五十近くがほとんど一致するという現象は、その五十近くの章段しか無かったとの想定を導くものである。これを図示すると図2のようになる。

しかしながら、「両業平集の間に関係があるとする論文として、

二、渡辺泰宏氏「在中将集考——その性格と成立に関する試論——」(昭和62年3月

『文学・語学』)

もある。渡辺氏は『在中将集』とほぼ同じ原小相公本が『雅平本業平集』をも資料としたことを説いている。

もっとも、「雅平——→在中」とする渡辺氏説に対して、田口尚幸氏は「在中——→雅平」と説いていたが、平成11年の「成立論から相補論へ——新世紀の伊勢物語研究——」の注(7)で、

両集の先後関係に関しては、在中——→雅平とする山田説・私見……A案と、雅平——→

在中とする渡辺説……B案がある。私は、以前、詞書の生成過程という点からA案の可能性が比較的高いと考えていた。(略)しかし、最近、在中特有の大和物語関連歌の多くが雅平にないという現象に気づき、B案の可能性を考えている。在中→雅平と仮定した場合、雅平が好んで在中の大和関連歌ばかりを採らなかつたという可能性は低いだろう

と述べている。右の注は『研究篇』の第三篇第三章「在中将集と雅平本業平集の比較考察(一)——大和物語との関係」と同内容ではないが、方向を同じくするものであり、どうやら、両集の先後関係を決定する根拠として『大和物語』中の諸段(或いは、その資料となつた説話)は普遍性を持っているようだ。

そこで、「在中→雅平」の可能性は、ひとまず無いものとして、大雑把にまとめると「雅平→在中」を説く二の渡辺氏論文に戻ろう。渡辺氏は72頁の表6で、「原小相公本(在中将集)」と「雅平本」のみが一致、若しくは類似する箇所八つを挙げて、73頁で次のように述べている。

今このようなものをまとめると、「表6」のごとくになる。番号1、2は原小相公本、雅平本のみが「きこえし時」で、他の古今集、伊勢物語、類従本の「申す」による表現とは異なっている。これは、偶然に原小相公本と雅平本の編者が好んで「きこゆ」を用いた、あるいは両集が同一の資料を用いたという可能性を残すものの、またやはり両集の一方が他方を参考にしたために生じたとも考えられるものである。他の番号3の「所」、番号4の「かへりなむ」、番号5の「人く」、番号6の「いそかし」、番号7の「かへる道に」、番号8の「わかる」についても同様のことがいえるだろう。

更に、「表6」以上に有力な根拠として、「表7」に

【原小相公本(在中将集)】

月を見て

55おほかたは月をもめてしこれそのつもれば人のおいとなる物

【雅平本】

月をみて

36 おほかたは月をもめてしこれそのつもればひとのおいとなるもの

【伊勢物語（天福本）】

88 昔いとわかきにはあらぬこれかれともたちともあつまりて月を見てこれかなかにひとり

おほかたは月をもめてしこれそのつもれば人のおいとなる物

（以上、誤字その他表記を一部改めた）

を挙げて、

原小相公本と雅平本が別個に成立したとすれば、両集はそれぞれ伊勢物語から「月を見て」の部分を選び出さねばならず、それは偶然に偶然が重なったとでもいうほかはないだろう。

と述べている。以上合計九箇所だけ見ていると、確かに、両業平集の間に交渉があつた蓋然性が高くなる。しかし、『雅平本業平集』七十首弱、『在中将集』八十首強全体の中で吟味すると、いかがであろうか。今更言うまでもなく、その七十首弱と八十首強とを照合せると、詞書の文体が違う例が、遙かに多く存在するのである。又、『表7』の例に就いて、渡辺氏は詞書の影響関係を「『伊勢物語』第八十八段→雅平本→原小相公本（在中将集）」のように考えて居られるようであるが、このうちの後半の矢印はよくわかるのであるが、何故、勢語の「いと若きにはあらぬこれかれ」という、和歌の主題に密着した文言が削除されたのだろうか。

私は両業平集の源泉が、比較的初期の小さな形態の第八十八段だと思ふ。その小さな物語は、「昔男」がまだ若いのに月を見て「老い」を連想する所に面白味があるのであって、その方が業平らしいではないか。ところが、両業平集に採歌された後、和歌の詞にひかれて「老人達の集まり」とする長い詞書が増益されてしまったのだと思ふ。

しかしながら、右は単なる憶測の域を出ないので、今は百歩譲つて渡辺氏の説に従つて図示することにすると、図3のようになる。^(注3)この図3に対する反論は図4の通りである。

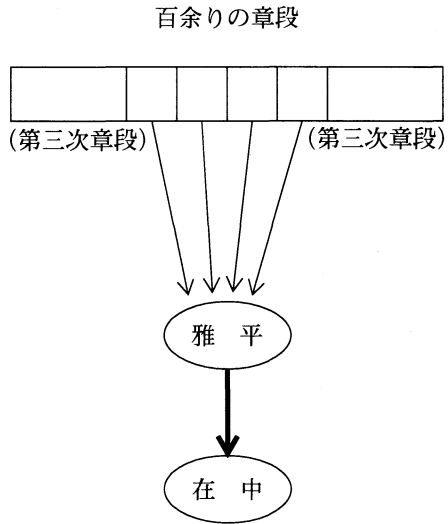


図 3

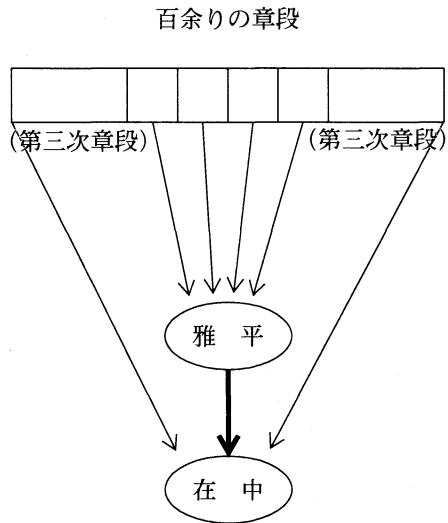


図 4

『伊勢物語』から『雅平本業平集』へ、『雅平本雅平集』から『在中将集』への流れを示す矢印も付け加えておいた。言わんとする所は、もし当時の『伊勢物語』が現行に近く百段以上に増益していたならば、『在中将集』は雅平本その他の業平本を参照し終わった後に、所謂第三次章段約七十のうち七十とは言わぬまでもせめて二十数段、十数段から採歌してもよかつたのではないか、ということである。例えば、『在中将』「在原なりける男」と記名されている第六十三段や第六十五段を何故採歌しなかつたのか。

「面業平集を巡る論争は、『何故採つたか』から『何故採らなかつたか』へ争点を移すことによって、圧倒的に片桐氏が有利になる。『何故採つたか』という問いかけに片桐氏は「小さな伊勢物語」という答えを提示し、又、石田氏は「何らかの基準あるいは見当」という別解、上野氏は「世評」（再録本16頁3行目）や「正しい知識」（他に信頼すべき資料）（同一行目）という別解、そして、渡辺氏は他の業平集（『在中将集』の場合）という別解を用意する。これによって、論争は互角に進む。いっぽう、採られなかつた歌への着目は『研究篇』に於いてもたつた一度、第三篇第二章の章末の

(商業平集の) 取った歌、取らなかつた歌が殆んど一致しているという事実こそは、両者が恣意的に伊勢物語から歌を抜き出したのではなく、同時代の少し異なつた伊勢物語からすべての歌をとつた(略)とする私見に、まさしく適合すると思ふのである。

(傍線とカッコ内は引用者に拠る)

だけであるが、この段の歌を何故採らなかつたのか」という問いかけを繰り返していった場合、全ての第三次章段に就いて説明し、なおかつ採つたほうの理由説明とも一貫させるのは極めて困難であろう。それよりも、その答えはただひとつ、これらの段は初めから無かつたのであると言つたほうが本當にゆいいつの客観的解答に成ると思ふ。

以上、本節の結論を図示すると、図5のようになる。即ち、一連の渡辺氏論文は、業平集の研究としては秀れているが、伊勢物語三段階成立論批判としても必ずしも有効ではないのである。

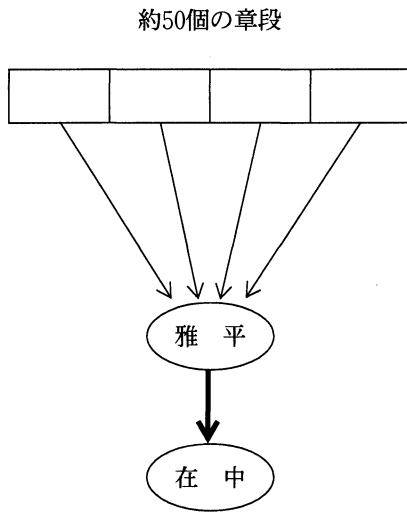


図5

第5節 第四十五段詳述

田口尚幸氏は平成11年、前掲「原体験へと回帰する昔男——伊勢物語一〜二十段に見る〈心〉と〈かたち〉の二元論——」の中で、

素材の新古は問わない。また、どこからが古くてどこからが新しいのか、常に確定できるともかぎらないだろう。素材はあくまでも素材だ。できあがっている完成品を試食して旨いと感じたなら、そのまま賞味すればいい。いちいち素材の成立の早遅を論じて完成品の味がわからなくなったら、元も子もない。(192頁)

と述べているが、私は二つの意味で納得できない。第一に、この問題については、既に片桐氏が説明している。

画家が絵を書く場合、キャンパスの中央から絵具を塗り始めてもその左端から塗り始めても、作品の理解鑑賞には何らかかわりない、作

品はあくまで出来上がった姿においてとらえるべきだという立場である。

しかしこのような考え方は、今述べている伊勢物語の場合にはあてはまらない。何故なら、この場合は、明らかに五十年以上の年月と数人の作者編者がかかわっており、一人の画家が一枚のキャンバスのどの部分から絵具を塗り始めたかということは全く異なった問題だからである。

（『研究篇』 293～294頁）（注）

第二に私が贅言を加えるならば、食材は新しいほうが旨いのに対し、文学や絵画は、後人が付け加えたり、補修したりした部分よりもやはり業平とその仲間達やレオナルド・ダ・ヴィンチの手にかかる部分のほうがすばらしいものである。勿論第三次成立章段の中にも文芸的に優る段が数多く含まれているように、しかし、第十四段その他の東下りの章段、或いは、第七十段～第七十二段などの伊勢齋宮関連章段、といったような「付加増益によって出来た章段」は、「既に存したものに比べて量的に短小なばかりか内容的にも一番煎じの域を出ず、従って文芸的にも劣る」と言わなければならないし、又、集成本上段鑑賞欄で「不出来な段」「末の世の迷惑な増補」とされている第六十三段その他は、本当に迷惑な増補と感じざるを得ない。

以上二つの意味で、三段階成立論は新世紀にも引き継がれて行かなければならないと思う。

だが、その前に、今世紀中に明らかにしておきたいのは、両業平集に拠って物語の原初形態を探るといふ片桐氏のアプローチが、少なくとも幾つかの章段に於いて極めて有益だということである。

やや長いが、第四十五段の全文を引用する。

むかし、男ありけり。人の娘のかしづく、いかでこの男にも言はむと思ひけり。うち出でむこと難くやありけむ、もの病になりて死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」と言ひけるを、親聞きつけて、泣く泣く告げたりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、つれづれと籠りをりけり。時は六月のつごもり、いと暑きころほひに、よひはあそびをりて、夜ふけてやや涼しき風ふきけり。螢たかく飛びあがる。この男、見ふせりて

ゆく螢雲のうへまで去ぬべくは

秋風ふくと雁に告げこそ

暮れがたき夏の日ぐらしながむれば

そのこととなく物ぞ悲しき

『研究篇』ではこの章段は全体が第二次成立とされている。即ち、同書の中で両業平集に採歌された段の一覧表が掲載され、その段の一部の場合番号の傍らに三角印が付けられることになっているのだが、「45」という数字の傍らに三角印が無い。(171頁。172頁)。そして、平成4年の片桐氏『伊勢物語』を読む¹⁾でも第二次成立章段の代表例として扱われている(『王朝物語を学ぶ人のために』)。

しかしながら、業平集を実際に繙いてみると、まず、『在中将集』では、

夏の夜、風すゞしうふきてほたるとびあがる

10行ほたる雲のうへまでいぬべくは秋風ふくとかりにつげこせ

とあり、又、『雅平本業平集』では、

みな月のあかつきがたに、かぜのふきしをながめしほどに、ほたるのわたりしかば

59ゆくほたる雲のうへまでいぬべくはあきかぜふくとかりにつげこせ^{注)}

とあって、いずれも『伊勢物語』の第二首目「暮れがたき夏の日ぐらし……」が漏れている。従って第二次成立はあくまで一部分に留まると考えるべきだろう。以上は形式的処理に過ぎぬが、内容上も、現行第四十五段から両業平集へという流れは考えにくい。物語の地の文が著しく短くなっているのは歌集詞書の常であり全く構わないのだが、女の片思いと死という極めてショッキングな記述が削ぎ落とされて背景の自然描写だけが残ったということになってしまいうからである。

やはり第四十五段は一部が第二次成立、残りの部分が第三次と考えるのが最も学問的であろう。では、その最初の一部、即ち、第一次第四十五段はどのような作品だったのだろうか。

昔、男がいた。男は夏が嫌いだ。暑い一日、日が暮れて、一瞬涼しい風が吹いた。そこで、風にあおられて高く舞い上がった螢に託して秋の到来を天上の雁に告げ、まだ夏が何十日も残っているにもかかわらず時の進行を早めようとした。

両業平集から窺い知られる第一次第四十五段は、右のような短い、しかし軽妙洒脱な作品であったと思われる。この和歌の発想はあかなくにまだきも月のかくるるか

山の端にげて入れずもあらなむ

(第八十二段)

と相通するものである。^(注6) 男は月が好きだから月の入りを遅らせようとしたが、夏は嫌いだから、今度は逆に時の進行を早めようとしただけの違いである。

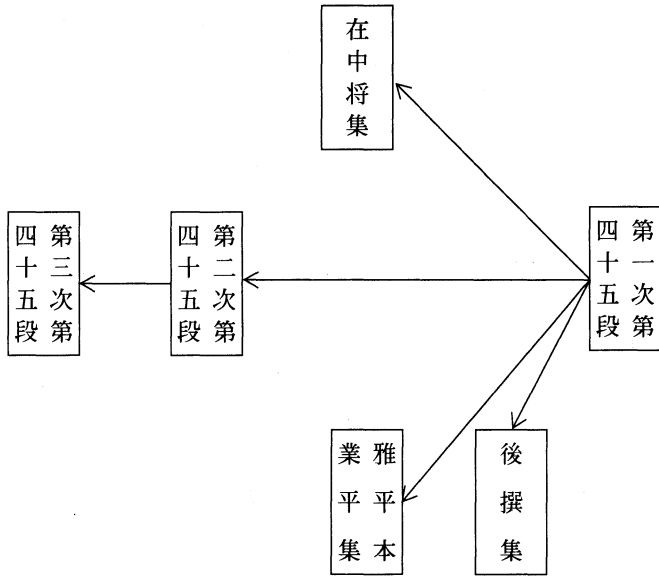


図6

『後撰集』では秋歌上の部立てに題知らずで採歌されているが、残念乍ら『後撰集』編者はこの小品の面白味が全くわかっていなかったと言わざるを得ない。秋に風が吹いたのを、「秋風吹く」と詠んでも全く陳腐なのである。しかし第一次第四十五段は、同じ主題で第二首「暮れがたき夏の日ぐらし……」を増益した。これを仮に第二次第四十五段と呼ぶことにする。この第二首の第五句の「悲し」は、特に例えば『源氏物語』などでは哀傷歌によく使われる形容詞であるが、そのために、或いは、第一首の「螢」を何らかの文学的理由に拠り鎮魂の景物と読み做したために、女の死と男の追悼を主題とする物語に変貌したのではなからうか。冒頭でも触れた通り、片桐氏の仮説は、正確には、多段階成立論であり、両業平集編纂後の時期も更に細分する必要がある。その時期のうちの、比較的初期に第二次第四十五段が成立、比較の後期に第三次の、つまり現行の第四十五段が成立したのだと私は特定したい。^(注6)

以上、第四十五段の三段階成立論は、両業平集のみならず、『後撰集』に立脚したものである。まとめると図6の通りである。

増益者が螢を鎮魂の景物と読み做した文学的理由として、古来の指摘を参考にすれば、まず頭に浮かぶのは『長恨歌』である。百歩譲ってそうだとにしても、この段では、娘が一方的に噂を聞いて知っているだけで、昔男は何も知らない。契りを結んでいないのは勿論のこと、対話

があったとしてもせいぜい物越しの二言三言である。楊貴妃を失った玄宗皇帝（或いは愛妃を失った漢皇）と同じような「恋の鬱情」を昔男に求め、恋の閨怨的要素を読み取るのは無理だと思う。

いったい、片桐氏が「昔男」の人間像も三段階に分けて仮説していることは自作他作の研究書に拠ってよく知られているが、その概要をまとめると次の通りである。

〔第一次〕

第一次『伊勢』で描かれている主人公は、いちずな恋、ひたむきな愛に生きる、まことに純粋な男であった。

〔第二次〕

第二次『伊勢物語』も、前述のように在原氏の翁が語るといふ物語的姿勢が強く打ち出されているほかは、おおむね第一次『伊勢』の忠実な延展がはかられている。

〔第三次〕

始めから女性よりもはるか上に位置するすばらしい男という書き方である。

（以上、〔第一次〕→〔第三次〕を通して、前掲『鑑賞日本古典文学』に拠る）
第三次成立の章段は、（略）広く女性に情けを垂れ、多くの女性たちに讃仰される恋のヒーローとして描かれ、みずから恋に苦しみ傷つくことがないという描き方になっている。

（前掲『王朝物語を学ぶ人のために』に拠る）
右のうちの〔第三次〕の男性像を念頭に置きつつ、現行第四十五段の昔男は女性に情けを垂れたと考えるべきであらう。

さて、この第三次第四十五段は幻巻に取られている（平4拙稿「盛夏の螢そのほか——幻巻のなかの勢語——」『富山大学人文学部紀要』18）。今、仮に、『源氏』以降に初冠本から狩使本が派生したという渡辺泰宏氏説に従うとすると、その狩使本編集者と商業平集編者のいずれかが、女の恋と死という味の濃い文学から、季節の移り変りと自然描写を主題とするうす口の文学へと縮小し、和歌も同趣の二首のうちの一首を捨てたということになってしまふのである。

第6節 第5節までの総括

三段階成立論に対して、管見に入っただけでも、十四、五人以上の学者が疑問・反論を提出していた。それらはその辿る道筋に拠っておおよそ六つに分けられるが、六つとも有効とは思えない。『伊勢物語』の研究は片桐氏説に従うのが最も安全なのである。但し、第四十五段は第三次章段に分類するべきであって、昔男の人物像も「一途で純粋な恋」という第一次第二次章段にしばしば描かれた有様をあてはまるより、第三次の諸段の持つ新しい傾向に即した解釈をしたい。

二十世紀半ばに出た『伊勢物語の研究（研究篇）』を巡って、二十世紀後半の国文学界は賛否両論を繰り返した。そうなった原因は、一つには、三角印の脱落である。このような一字二字のアクセント、一字と言うに足らざる誤植さえ無ければ、片桐氏説の定説化はなお一層加速されていたであろう。しかしながら、それでもやはり『伊勢物語』百余段の生成の足取りを大局的には見事に据えた『（研究篇）』は幾世紀にも亘って伝えられて行く不滅の業績であることに変わりはないのである。

補節 田舎蔑視諸段の後発性

最後に、学会発表後に出た渡辺泰宏氏「伊勢物語における万葉類歌——その典拠と採用の方法——」（平成11年10月『平安文学論究』第十四輯）を検討したい。渡辺氏本人の意図とははずれてしまうかもしれないが、私は私なりに学恩を受けたつもりであり、本節の小見出しで示したような見通しを立てることができたからである。

「序」と「結」を加えて六つの部分から成るこの論文のうち、「二」では、『万葉集』を採り入れる際、『伊勢物語』作者は口承を経由せず、直接目で読んだとの論旨である。私も賛成したいが、それが「伊勢物語が〈歌語り〉によって次第にかたちをなしたとする説に対して」「疑問を提示したことになった」（論文全体の末尾）とは思えない。何故なら、氏の根拠として挙げられた第二十三段と第七十四段はいずれも第三次章段に属するからである。前拙稿で述べた通り、私は口承文芸的性格を第一次第二次章段に限定し、書承文芸的な第三次と対峙させている。

「三」は典拠となる万葉歌が『万葉集』の特定の巻に集中すると述べたものである。興味深い指摘であり、又、「二」の論旨と連動することになる点でも、貴重である。

「四」で取り挙げられたのは第十四段、第二十三段後半及び第二十四段であるが、これらの段の「陸奥（みち）の国」の女、「河内（かふち）の国、高安」の女及び「かたるなか」の女は「負」性を持って居り、彼女達の「るなか」びた雰囲気や時代遅れを際立たせるために二句切れ、四句切れ、「二句、四句切れ」の万葉類歌を詠ませた、という論旨であろうか。

二句切れ、四句切れ及び「二句、四句切れ」は一語でまとめると、五七調ということになる。優美な七五調に対して、五七調が力強さ、荒々しさを醸し出すのは、少なくとも古代文学の和歌の常識であって、女流歌人は好まないだろうと演繹的にも予測される。古代前期の『万葉集』の女流歌人を代表する額田王は豊かな感受性を持ち合わせ、宮廷歌人として集団を代表する際にも、個人的感慨を詠み込む際にも、異彩を放っていたと定評がある。前者の公的な歌8番18番はそれぞれ四句切れ、「二句、四句切れ」であり、更に、長歌の常ではあるが16番や17番も五七調である、特に（以下、全集本による）

8 熟田津に 舟乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな

は力強い、男性的な感じである。一方、後者の私的な歌は、20番（一応、四句切れ）のような例外もあるが、

1 1 2 古に 恋ふらむ鳥は ほととぎす けだしや鳴きし 我が恋ふること

1 1 3 み吉野の 玉松が枝は 愛しきかも 君がみ言を 持ちて通はく
のように三句切れであったり、

7 秋の野の み草刈り暮き 宿れりし 宇治のみやこの 仮廬し思ほゆ

4 8 8 君待つと 我が恋ひ居れば 我がやどの 簾動かし 秋の風吹く

のように句切れなしである。これらの相聞歌は全て優美でなよやかな感じがし、四句切れの20番もそうである。思うに、恋をすると女らしくなるのではなからうか。

古代後期の『源氏物語』の女性達も概して五七調を好まないという感触を持っている。例えば、夕顔の「山がつの垣は荒るとも……」（「帚木」。82頁9行目）という四句切れの贈歌には自分達母娘をほったらかしにしている頭中将への怒り、藤壺の「世がたりに人や伝へん……」（「若紫」。233頁1行目）という二句切れの答歌は、自他共に破滅につながる不義密通を強引に続けようとする光源氏への怒りが込められている。紫式部はレトリックより内容重視で言葉を選ぶから例外もたくさんあるが、古代文学一般に於いて、女性が五七調の歌を詠むと違和感を

与えるのは当たり前だったのである。にもかかわらず、先述の諸段の五七調を異本章段を除く伊勢物語の方法と見做し、「伊勢物語が成長して成ったとする説」に対して、「疑問を提示したことになったかもしれない」と論文を結ぶあたり、この論文及び平成10年2月『国文学』の論文目録1番〜11番からは理解できなかった。氏の十二本以上の業績は、私如きが今更言うまでもなく、鋭いし、極めてしっかりしたものであるが、反論にとらわれているのではなからうか。

私が関心を持ったのは作中和歌の区切れではなく、先述の諸段、特に第十四段、第二十三段が全て第三次成立だということである。

第十四段は陸奥の女が京の男を「めづらか」に思つて、二人が結ばれた物語である。男は反実仮想の構文を用いて、

栗原のあねはの松の人ならば

都のつとにいざといはましを

という別れの挨拶を残す。契りが結ばれた以上、女が男に執着するのは当然であつて、批難されるとすれば男の側であるはずなのに、作者は、男の儀礼を真に受けて喜ぶ女を嘲笑するような口吻である。第二十三段の場合、男は経済的援助を得るため、河内の女と縁を組む。所期の目的を果たしたが、やがて一方的に通うのを止めることになる。河内の女はあきらめられず、

君があたり見つつを居らむ生駒山

雲なかくしそ雨は降るとも

君こむといひし夜ごとに過ぎぬれば

たのまぬものの恋ひつつぞふる

と相聞歌を連作する。二句、四句切れの第一首目は、確かに時代遅れで野卑な感じがするが、時代遅れなのは、契りを結ぶ前からうすうす予想できたのではなからうか。あまり縁切りの理由にならぬはずである。

このような田舎蔑視の章段は、第三次の中には、他にも、第十三段——武蔵に住みついた男が、土地の女と結婚したのを恥づかしく思う段——や、第十五段——みちの国の人妻について語り手が「さるさがなきえびすごころ」と評する段——が挙げられるが、第二次や第一次の中には見当たらない。

第二章段に属する第六十八段の全文を引用する。

むかし、男、和泉の国へ行きけり。住吉の郡、住吉の里、住吉の浜をゆくに、いとおもしろければ、おりるつつゆく。或る人、「住吉の浜とよめ」といふ。

雁鳴きて菊の花さく秋はあれど

春のうみべに住吉の浜

とよめりければ、みな人々よまずなりにけり。

美しい自然に接して感動の頂点に達したのだが、第五句に掛けられた「住み善し」は、条件付きの居住希望と取れなくもない。同じく周知の通り第二次に属する初段の舞台「大和」は、「都／田舎」の二極対立に於いて、どちらに属するのだろうか。

第二十三段前半の大和の妻は誇りの高さ、第二十段の大和の女——男に心が「うつろ」ったのですね、と返歌した——は洗練された洒落っ気の特徴とするし、少し前まで平城京が置かれていたという理由で、「都」に分類されているのが集成本「解説」をはじめとする現時点での通説である。しかし以上二つの段は第三章段である。初段の場合、

おもほえず、古里に（いとなまめいたる女はらから）が（いとほしたなくてありければ

という地の文から考えても、むしろ「田舎」の範疇に入れるほうが素直な読みである。

更に、男が詠んだ

春日野の若紫のすり衣

しのぶのみだれかぎり知られず

も、集成本「解説」の再検討が必要だろう。もし「異性讃歌」であるとすれば、わざわざ着ていた狩衣の裾を切った点を含めて、激しすぎるのである。『古事記』の景行天皇は美濃国の姉妹を物にしようとし、又、天津日高日子番能邇々芸能命は姉妹二人のうちの妹に求愛し、結婚した。初段の男が婚姻を念頭に置いていたと言いつもりはないが、やはり、一途で純粋な恋歌ではあったようだ。

「心と言動との間の屈折」は、なるほど、作品全体に流れている『伊勢物語』の特徴であろう。しかしながら、敢えて比較すると、第三章段のほうどちらかと言えばよくあてはまり、第二次以前の中には、初段のように「心と言動との直結」を主調とするものも、その数の多少はともかく、確かに存在する。

ここで想起されるのが、『源氏物語』の注釈書『河海抄』に関する島崎健氏の画期的論文である。島崎氏は昭和五十五年の『河海抄』序説——李部王記の問題——（『国語国文』49巻5号）に於いて、『河海抄』を代表する『李部王記』（散佚書）引用が、実は後人の書き入れであったことを実証し、当該年の、『国文学年鑑』の学界時評の中で、片桐洋一氏も大きく取り挙げてゐる。島崎氏は、

現存河海抄諸伝本に於ける李記の注の異同、それは、河海抄の個としての固有の注釈論理が一般的な注釈概念の中に解消されていった、いわば非文学的な過程の象徴的な現象であった。

〔李記〕とは『李部王記』のこと。カッコ内は引用者に拠る）

と、論文を結んでいる。継承しつつ、私なりの平たい言葉に直せば、『伊勢物語』の場合も在原業平や仲間達のかげがえのない個性が商業平集編纂以後第三次章段が漸次増益されて行く過程で、少しずつ霞んでしまうことも心配されるのである。歌物語の一段一段に込められた作者の個性は、注釈書的一条一条に込められた、例えば四辻善成の個性以上に、尊重されなければならない。第一次第二次伊勢物語の文学精神や特定の章段を念頭に置いて第三次章段を読み解くのはまだいいとしても、その逆の方法には極めて慎重な配慮が必要なのである。

注

〔1〕 言うは易く、行ふは難いが、本文批評は国語の通時的研究、解釈は国語の共時的研究をまず第一に考えるべきである。

〔2〕 木戸久二子氏「神宮文庫蔵『伊勢物語注本』をめぐって」（平成元年12月『中古文学論攷』）は、中元悦子氏の論考と厳正に区別しつつ、狩使本に就いて、貴重な指摘をなさっている（例えば、15頁下段）。H段は廣岡義隆氏を含めた三人の共著「翻刻『伊勢物語注本』（下）」（平成六年『三重大学 日本語学文学』）に写真が載るが、中元氏に拠れば、改変を経た本文とのこと。平11『狩使本伊勢物語——復元と研究

——』（林美朗氏）も大変有益であった。但し、H段の校異（25頁）は、本拙稿が触れた四本を集成しているが、第一句に限っては誤植か。

なお、本論で述べた主旨は従来の大方の見方と一致するものだと認識している。特に、平成二年十二月に出た、田口尚幸氏「狩使本伊勢物語について——その断片資料に見る新しさ——」（『中古文学』46）は不滅の価値を持つ。余談乍らその礎稿が口頭発表された際片桐洋一氏に激賞されたものであるが、惟喬親王章段を含む多くの、但し、内田氏論文と重ならぬ章段、詞章を適確に考察した結果、現存狩使本断片、現存狩使本系諸本に付加・改変などの合理化の形跡が少なからず認められること、かと言って、狩使本そのものが初冠本より新しい

とは限らないことを立証している。

- (3) 片桐洋一氏は昭46『校注古典叢書 伊勢物語』の解題に於いて、『伊勢物語』の書名について第三説……伊勢斎宮の段が巻頭だから、第四説……同じ段が、特に巻頭になくても、物語の中で特に重要秀逸な段だから、を主要二説として紹介し、第四説を選んでゐる。福井貞助氏の手にかかる昭和四十七年全集本以降現在に至るまで、第四説が有力であるが、『竹取物語』、『うつほ物語』及び宇治十帖によってよくわかるように、当時の書名は全体の中で非常に前のほうに位置する部分に由来するものである。やはり、昭和六十二年『新研究』の主旨と近く、『伊勢物語』の最初の形態は狩使本（の最初期）の段序だったと思う。百二十五ページの短篇小説の六十九ページ目で、或いは、二百五十ページの中編小説の百二十八ページ目で題名の由来を明かすなどというのは印刷製本技術の発達した近代の趣向であつて、題簽の誤まりさえ懸念される当時の読者には不親切である。初冠本が発点ならば、少なくとも別名として、「ならの京物語」「春日物語」が伝わっていてもよさそうである。但し、『石清水物語』（一二四九―一二七二）や『白露』（一三三二―一三三六）の例もあり、鎌倉期南北朝期にはそういった趣向も一般化して行つた可能性はある。
- (4) 田口尚幸氏は「共通資料X」だとしている。「雅平本業平集の編纂態度」（昭和63年6月『三田国文』9）
- (5) 渡辺泰宏氏は、在中将集の第一資料が類従本であることを実証している。これは後行論文などでも受け継がれ、私自身も心よりの敬意を抱きつつ、当面の課題が『伊勢物語』であることに慮つて、その他原小相公本なども、図示しなかった。『文学・語学』誌に直接当たつて、本拙稿の不充分を補われたい。

- (6) この意味でも、『伊勢物語』と『源氏物語』は、それぞれに固有なアプローチが必要である。片桐氏説の価値が「第一次」→第二次→第三次の流動の足取りを辿る所のみあると誤解されているとすれば、少しは、武田宗俊氏説が「第一次（紫上系）→第二次（玉鬘系）→第三次」を主張したことの影響もあろう。

「昔、男ありけり。……」「昔、男ありけり。」と仕切り直しが繰り返される『伊勢物語』は、例外もあるが、原則として、四十の巻頭が冒頭構文と似ても似つかぬ『源氏』前編と別の読み方を要求しているのである。

- (7) 本拙稿に於ける業平集の引用は、昭42『伊勢物語の研究（資料篇）』（片桐氏）に拠り、必要に応じて、昭44『私家集 集抄一』等と照合した。

(8) 佐竹昭広氏「人麻呂の反歌一首——意味論的考察——」(昭46、全集『万葉集』第二巻)にも、月の進行を止めようという古代人の感性が述べられている。

(9) 本拙稿本論で挙げた「あかなくにまだきも月の……」のみならず、古今集業平歌として人口に膾炙していた「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」を典型として、自然や季節を主題としたものが第三次章段と比較して業平には多かつたと思われる。その意味でも第一次第四十五段の先発性を感じる。もつとも後人が継承した可能性が消えない限り、その種の断定は極力慎しむべきだが、それにしても、後撰集秋歌上から第一次第四十五段へという関係は考えにくく、万一、将来、両業平集の外部資料性が動揺することがあっても、片桐氏のアプローチの有効性を保証するのがこの第四十五段である。そうした意味でも本来、中心論拠、最有力徴証として挙げられるべきであった。

なお、天福本百二十五段を「在原朝臣業平集」と見做して、ほぼ他作から成る部分七十余段(第三次成立章段)と、自作の割合が多い五十段弱の主題の傾向を比較してみると、他作は恋歌が集中し自作は自然詠が多い柿本朝臣人麻呂歌集の構成(昭58『萬葉のあゆみ』(伊藤博氏著)49～53頁参照)と相通するのではなからうか。後考を俟つ。

『伊勢』成立論史に関しては、昭63『竹取物語伊勢物語必携』所収の高田祐彦氏「研究の現在」が大変参考になった。